

脇田遺跡

福岡県筑紫野市大字塔原所在遺跡の調査

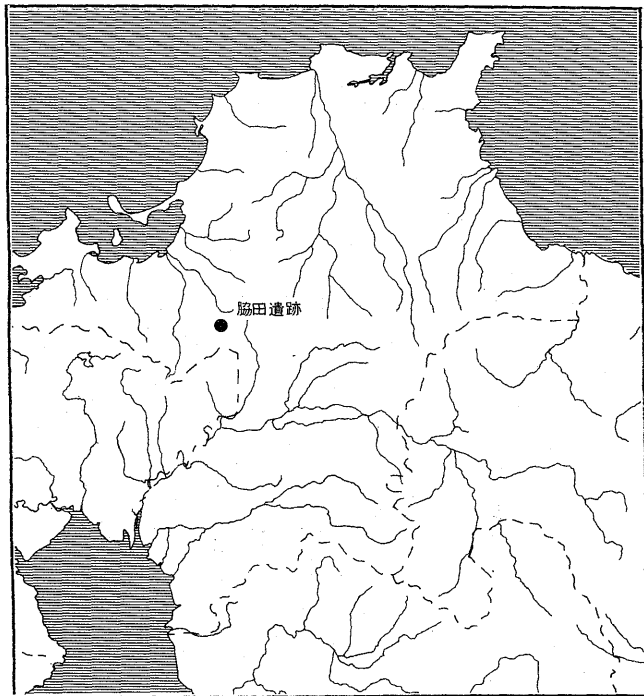
筑紫野市文化財調査報告書

第 9 集

1 9 8 4

筑紫野市教育委員会

わ き た
脇 田 遺 跡



序

筑紫野市には、一万年以上も昔から先人の足跡が知られており、後々の時代に至っても、数多くの文化遺産が温存されております。今回発掘調査された脇田遺跡もそのひとつで、貴重な文化財が世に知られたわけです。

本書が古代の文化を知り、歴史を考えてゆく一資料となれば望外の喜びであります。

なお、調査及び報告書の作成にあたっては、総合商事株式会社から多大の御協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

昭和59年 3 月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 松田 康男

例 言

1. この報告書は、筑紫野市大字塔原969-1外に所在する脇田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、総合商事株式会社の委託を受け、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した図は、山村淳彦、奥村俊久、長野智恵子、山崎順子、山本由紀子が実測し、奥村、鶴味加代子が製図した。
4. 本書の執筆は、出土遺物を奥村が担当し、他を山村が行ない、編集については両者が協議して行なった。

目 次

	頁
I 調査の経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
(1) 概 要	4
(2) 1号住居跡	4
(3) 2号住居跡	7
(4) 3号住居跡	9
(5) 4号住居跡	11
(6) 5号住居跡	13
(7) 6号住居跡	14
(8) 7号住居跡	14
(9) 脇田1号墳墳丘下の遺物	16
(10) 脇田1号墳	16
(11) 脇田遺跡出土の装飾品・鉄器	17

I 調査の経過

昭和57年10月13日、佐々木興産株式会社から筑紫野市大字塔原 969 番地の1外9544㎡の開発に伴い、埋蔵文化財の確認調査の申請が提出された。これを受けた当教育委員会では、開発予定地の一部が周知の遺跡となっており、すぐ北側には杉塚廃寺もあることから、同10月20日より2日間、試掘調査を実施した。調査の結果、住居跡2軒、溝2条、Pitなどを検出し、これらの遺構は開発予定地南部の丘陵上に限られることが明らかとなった。丘陵と県道の間は客土が著しく、下部は湧水がみられた。北部は杉塚廃寺に伴う遺構の検出が期待されたが、耕作土下は礫層となっていた。教育委員会では以上の試掘結果と、開発に先だって丘陵の発掘調査が必要である旨を報告した。

その後、当教育委員会と開発業者の間で協議を行ない、発掘調査に係る費用を開発業者の方で負担し、当教育委員会が発掘調査を実施する事とし、11月15日に筑紫野市と開発主体である総合商事株式会社との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。当教育委員会はこれを受けて翌16日から発掘調査を開始した。

現地調査は昭和57年11月16日から昭和58年1月24日まで行なった。また、遺物整理作業は筑紫野市立歴史民俗資料館で、昭和58年1月25日から同4月28日まで行なった。

調査組織については下記のとおりである。

総 括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	松 田 康 男
席 務		社会教育課長	松 浦 敏 春
		社会教育係長	豊 福 茂 美
	筑紫野市立歴史民俗資料館館長		武 藤 久 雄
調査担当	筑紫野市教育委員会	社会教育課主事	山 村 淳 彦

II 位置と環境

脇田遺跡は、筑紫野市大字塔原 969 に所在する。遺跡は、脊振山塊の東北端にあたる天拝山の北側裾部、標高42m付近に位置する。天拝山を背景に、前面には細長い平野が北西から東南へのびている。ここは、福岡平野と朝倉・筑後平野を結ぶ回廊にあたる地である。

以下、周辺に所在する遺跡を位置図にそって紹介しながら、歴史的環境を概観してみよう。

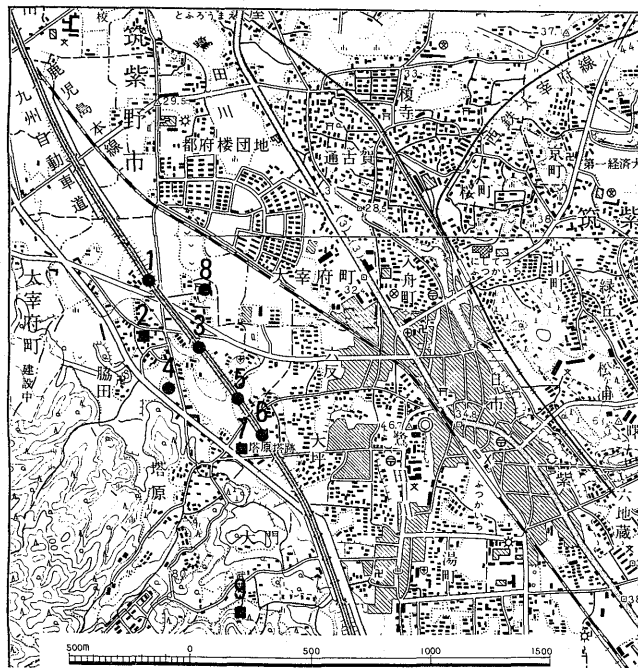
(1) 剣塚遺跡……………昭和48年、九州縦貫自動車道建設に伴い調査された。弥生時代の住居跡10・

袋状堅穴50・土壙墓15・甕棺墓18、前方後円墳1・方墳3・平安時代の瓦窯1基を検出。

(2) 杉塚廃寺……………大宰府郭内（右郭19条10・11坊）にある奈良時代の寺院。老司式軒先瓦と鴻臚館式軒丸瓦が出土。

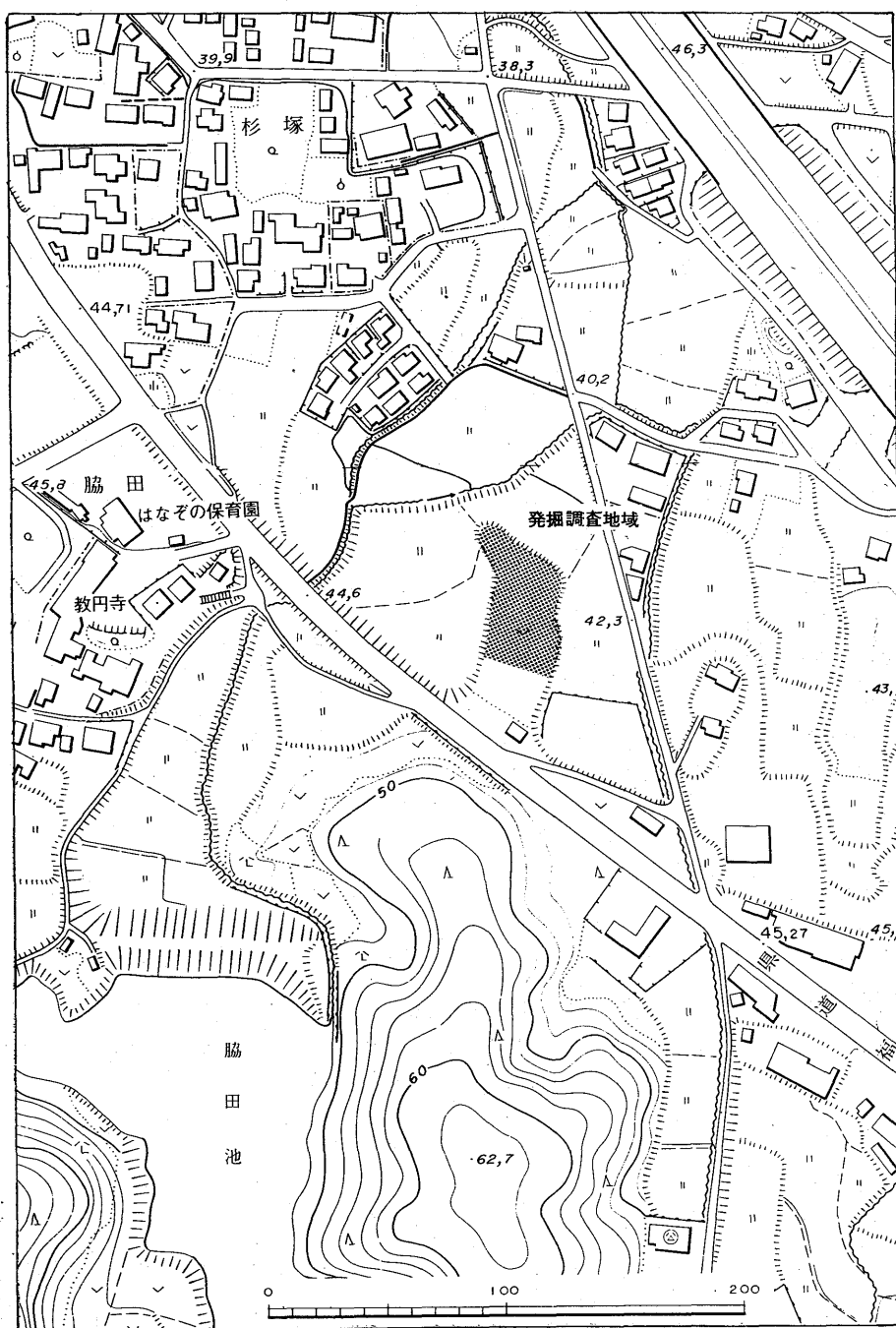
- (註3)
 (3)唐人塚遺跡……古墳時代の墓地を中心とする遺跡で、土壙墓21・木棺墓3・石棺墓6・古墳7、及び中・近世墓5基を検出。昭和48年調査。
 (註4)
 (4)桶田山遺跡……昭和49年の調査で弥生～中世の墓地・貯蔵穴・地下式土壙群を検出。特に平安時代の墓は、古代～中世の葬制研究に貴重な資料を提供した。
 (註5)
 (5)塔ノ原遺跡……弥生時代の甕棺10・土壙墓4、奈良時代の住居跡3軒を検出。
 (註6)
 (6)塔原廃寺……奈良時代以前の建立と考えられる太宰府地方最古の寺院址で、武蔵寺の前身とする説がある。国指定史跡
 (註7)
 (7)埴安神社古墳……6世紀後半の築造と考えられる横穴式石室の古墳。同神社境内に現存。
 (註8)
 (8)武蔵寺跡……天台宗の古代寺院で県指定史跡。『宇治拾遺物語』や『梁塵秘抄』にもその名がみえる。境内で11基の経塚が発見されており、中には大治元年などの銘文をもつ経筒がある。

- 註1 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 —X X IV— 1978
 註2 { 同 上 — IV — 1974
 筑紫野市教育委員会『杉塚廃寺』(筑紫野市文化財調査報告書 第4集) 1979
 註3 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 —X V III— 1977
 註4 同 上 — VI — 1975
 註5 同 上 — IV — 1974
 註6 福岡県教育委員会『塔原廃寺』(福岡県文化財調査報告書 第35集) 1967
 註7 筑紫野市立歴史民俗資料館『ふるさと筑紫野』 1984
 註8 { 小田富士雄・宮小路賀宏『武蔵寺経塚』 1970
 宮小路賀宏「武蔵寺第11号経塚発掘調査報告」(古文化談叢 第12集) 1983



1. 剣塚遺跡
2. 杉塚廃寺
3. 唐人塚遺跡
4. 脇田遺跡
5. 桶田山遺跡
6. 塔ノ原遺跡
7. 塔原廃寺
8. 埴安神社古墳
9. 武蔵寺跡

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

Ⅲ 調査の内容

(1) 概要 (第3図 図版1-1)

調査区は2500㎡を設定したが、明瞭に遺構が検出されたのは丘陵上の1800㎡であった。

遺構は、古墳時代前期の住居跡7軒と、横穴式石室の内部主体をもつ古墳1基、及び土壇、ピットを検出した。

住居跡はいずれも方形プランをもつ竪穴式住居跡で、全体として比較的大形のものである。

遺構の保存状態は上部が削られ、丘陵の縁部に位置する住居跡はその一部を欠くが、悲観的な状況とはいえない。遺物の残りも比較的良好である。

古墳は試掘調査の段階では主体部は確認されておらず、その周溝と墓道が溝として認知されているだけであった。封土は完全に削平され、石室は僅かに腰石の部分が残る程度であった。

これらの遺構は調査区南側に比較的多くみられ、この丘陵上をさらに山裾部に向って続くものと推定される。

(2) 1号住居跡 (第4、5図 図版2・4)

調査区内の北西隅で検出された方形プランの住居跡である。北西部の5分の1程度はすでに失われ、住居跡の規模は明瞭でないが、東壁の残りはよく8.2mを測る。東～西の規模も現存の8.8mを大きく越えないものと思われる。主柱穴は4本柱と推測され、うち1本はカットされていると考えられる。残る3本はいずれも、同程度のピットを切っており、建てかえが行なわれた可能性がある。主柱穴間は3.7m×4.4mを測る。

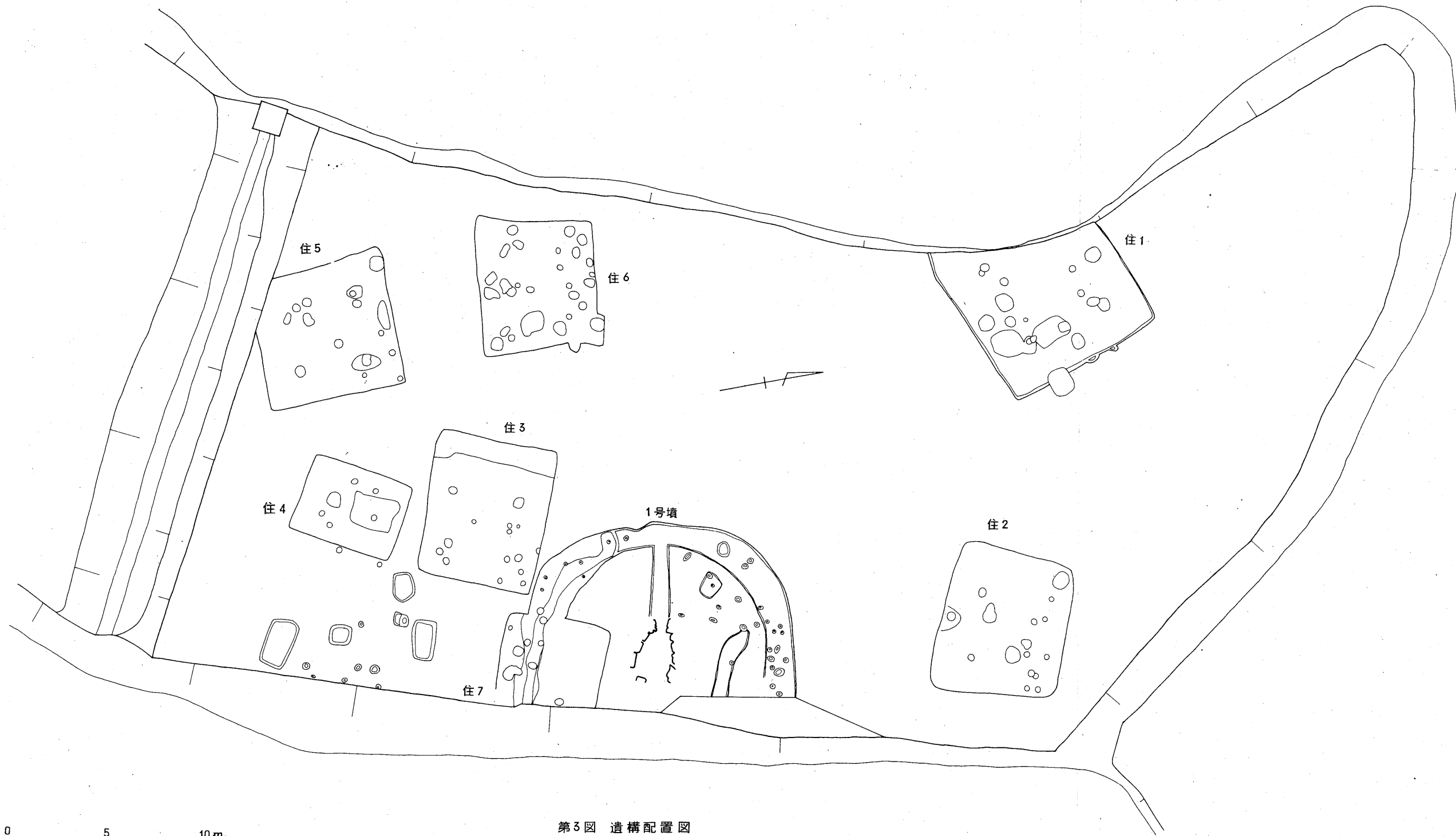
P1は径1.4m程度のピットであり、小形の土器5個体が出土した。遺物3・4・6は出土状況からみて、東から西側へ流れ込んだ状況であった。14はピットの底にはりついた状態、15は6cmほど浮いた状態であった。

P2からは10が底から20cm浮いた状況で出土した。

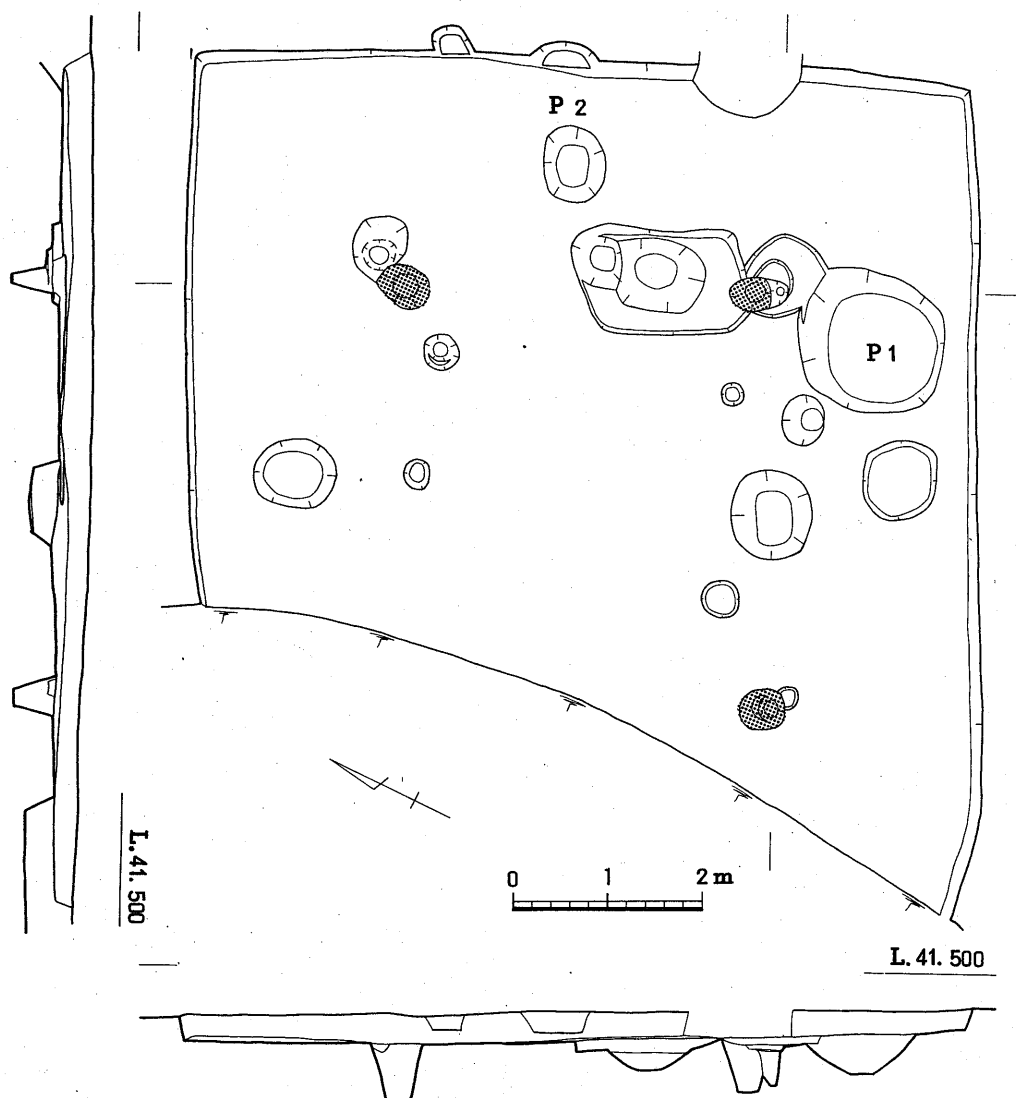
出土遺物

1号住居跡から出土した土器はいずれも土師器であり、他に石製品が出土した。

1は底部を欠失するが、長胴の甕と考えられる。口縁部はゆるやかに外反し、しまりの悪い頸部を経て、胴部上位で最大径17.4cmを測る。器壁は比較的厚く、外面にススの附着が認められる。2～6は丸底の壺である。2はやや大形で、全体にあまい感じを受ける。口縁部はまっすぐに外傾し、めりはりのない頸部を経て、ゆるやかなカーブを描く胴部に至る。胴部中位で最大径17.8cmを測り、口縁部と胴部にススの附着が認められる。3は均整のとれた形態を呈す。

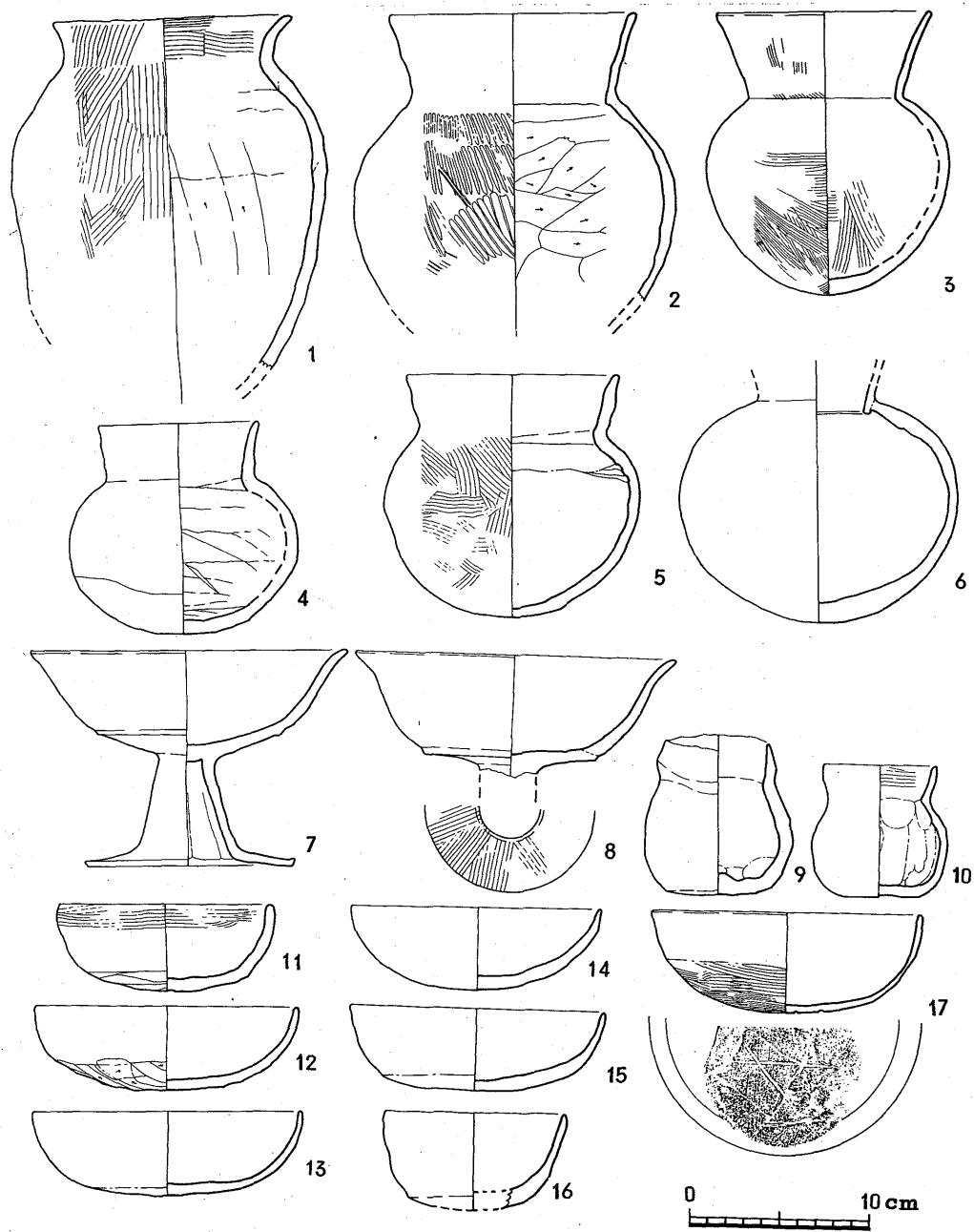


第3図 遺構配置図



第4図 1号住居跡実測図(1/80)

口縁部は僅かに外反し、胴部中位のやや上で最大径13.6cmを測る。口縁部の一部と胴部中位にススが附着する。4は口縁部が短かく直立するもので、胴部中位で最大径12.7cmを測る。5は口縁部がやや外傾し、胴部中位で最大径14.1cmを測る。底部の表面は剝落が著しいが、残存部には赤変がみられる。胴部から口縁にかけて一面にススが附着する。6は最大径(15.4cm)に比べ頸部が特に小さく長頸壺になるものと推測される。3・4・6は良質の胎土である。7・8はほぼ同形態を示す高坏である。坏部は口縁部が外反し、体部下半はやや張る。体部と底部



第5図 1号住居跡出土遺物(1/4)

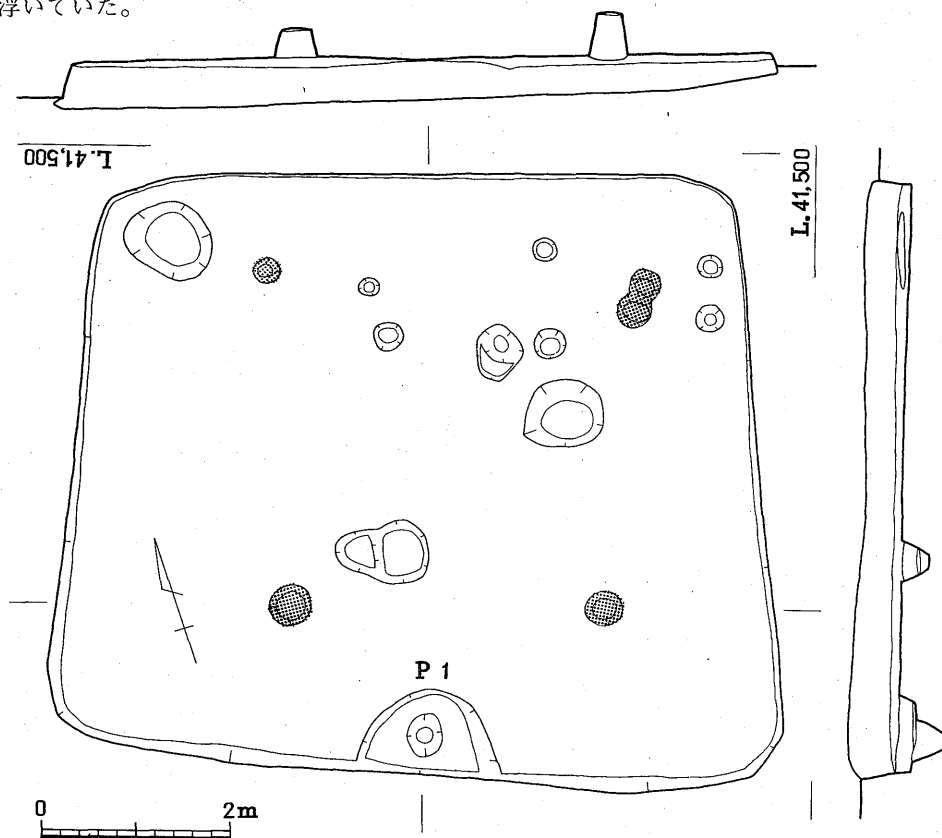
の境にはあまい段を有す。

脚部は7のみしか残存しないが、筒部は直線的で開きは弱い。裾部は外側に大きく開く。9・10は小壺である、9はやや内湾する口縁部が直立し、10は外傾する。胴部はいずれも下位に最大径を有し、9が8～8.4cm、10が7.5cmを測る。底部はいずれも平底ですわりがよい。全体に調整が粗い。11～17は椀である。椀は口縁部が内湾気味となるもの（11～13）、外傾するもの（14～15）、直立するもの（17）に分けられる。16は他の椀に比較して、口径に比べ器高が高い。17には底部にヘラ記号様のものが認められる。

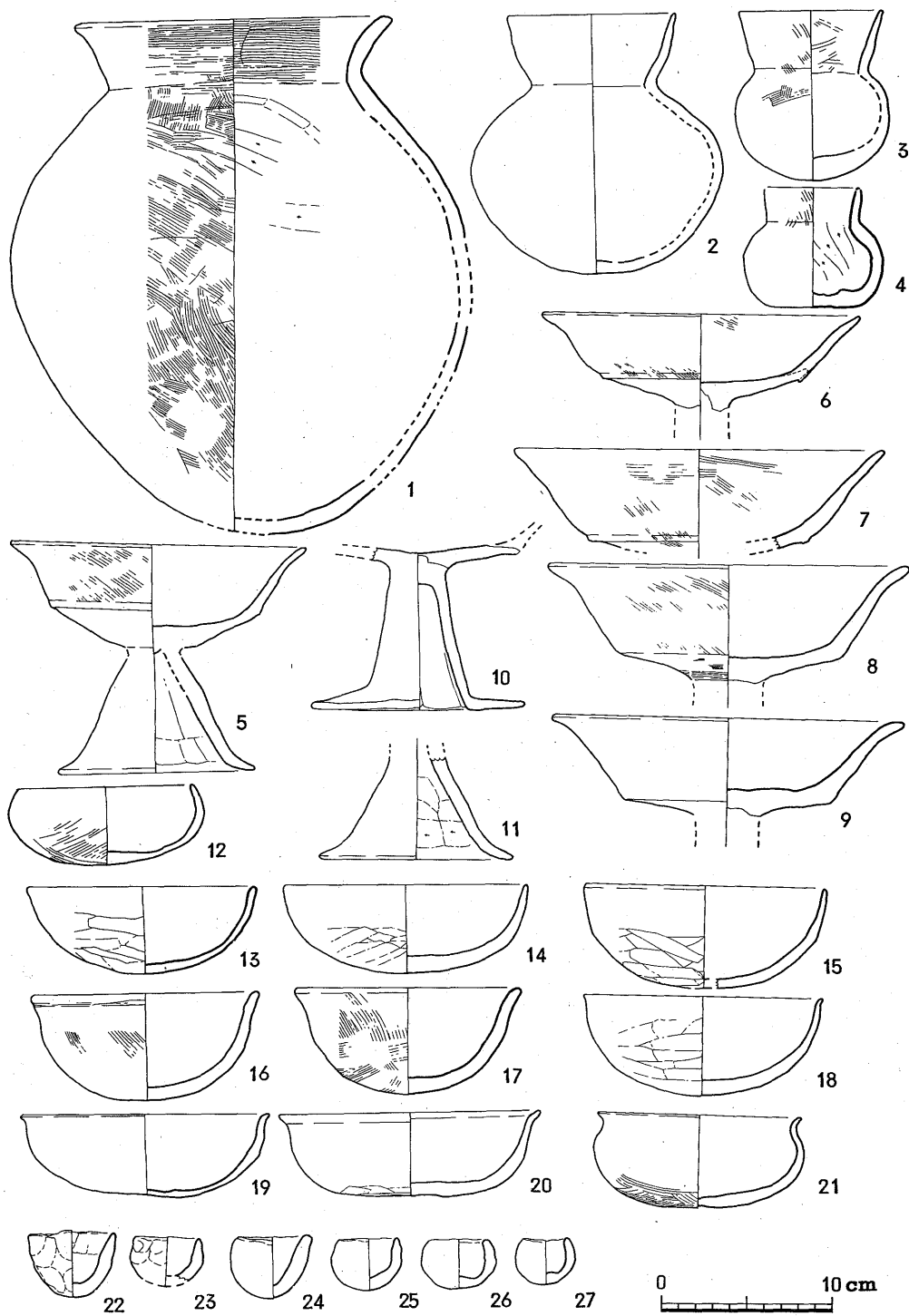
(3) 2号住居跡（第6・7図 図版1・2）

調査区北東隅で検出された方形プランの竪穴式住居跡である。規模は東西6.6～7.6m、南北6～6.2mを測る。壁は残りのよい南側で44cmほど残っていた。支柱穴はややゆがみが4本柱と推定される。

P1の底から7cmほど浮いた状態で5が出土した。壁の保存状態もよく、ピット内の深い部位からの出土で良好な資料である。このほかにも6個体ほど土器が出土したが、底から16～28cmほど浮いていた。



第6図 2号住居跡実測図 (1/80)



第7図 2号住居跡出土遺物実測図(1/4)

出土遺物

2号住居跡から出土した土器はいずれも土師器である。

1は甕で、ややいびつな形態を呈す。器壁は厚い。口縁部は外反し、口唇部はあまい平坦面を有す。胴部はやや強く張り、中位から中位上部にかけて最大径をもち、26.7cmを測る。底部には赤変がみられ、胴部にはススが附着する。2は丸底をもつ壺で、器壁は口頸部がやや薄く作られているものの、全体に厚ぼったい。口縁部はほぼまっすぐに外傾し、頸部は強くしめられる。

胴部は強く張り、最大径14.7cmを測る。底部はゆったりとした丸味をもっておさまる。3は小形の丸底壺で、比較的口頸部が長い。口頸部はまっすぐに外傾し、頸部はあまくしめられ、やや張りの弱い胴部へ至る。胴部最大径は8.9cmと測定され、推定口径を僅かに上まわる程度である。4は平底をもつ小壺で、底部を徐き $\frac{2}{3}$ 程度を欠失する。口縁は比較的短かく、僅かに外傾する。頸部から胴部中位にかけて、ゆるやかにふくらみ、以下は僅かにすぼまりながら底部へ至る。胴部最大径は8.1cmを測る。5～11は高坏で5が完形である以外は、坏部(6～9)と脚部(10・11)の破片である。坏部は体部と底部の境に段をもつもの(5・6・7)と、もたないもの(8・9)に分けられる。体部はいずれもほぼ直線的に外傾し、口縁部は外反するが、後者の方が外反が強いようである。底部は前者のものがふくらみをもち、特に5は著しい。脚部は大きく開き、裾端部が外方にやや引き出されるもの(5・11)、と僅かに開く筒部から裾部が水平に長くのびるもの(10)がある。椀は口径10.2～15.2cmを測る。口縁部が内湾するもの(12)、直線的に外傾するもの(13～15)。ゆるやかに外反するもの(16・17)、端部が外反するもの(18～20)、胴部が張り、口縁部が外反するもの(21)に分けられる。その外に手ずくね土器が6個体出土した。

(4) 3号住居跡 (第8・9図 図版2・4)

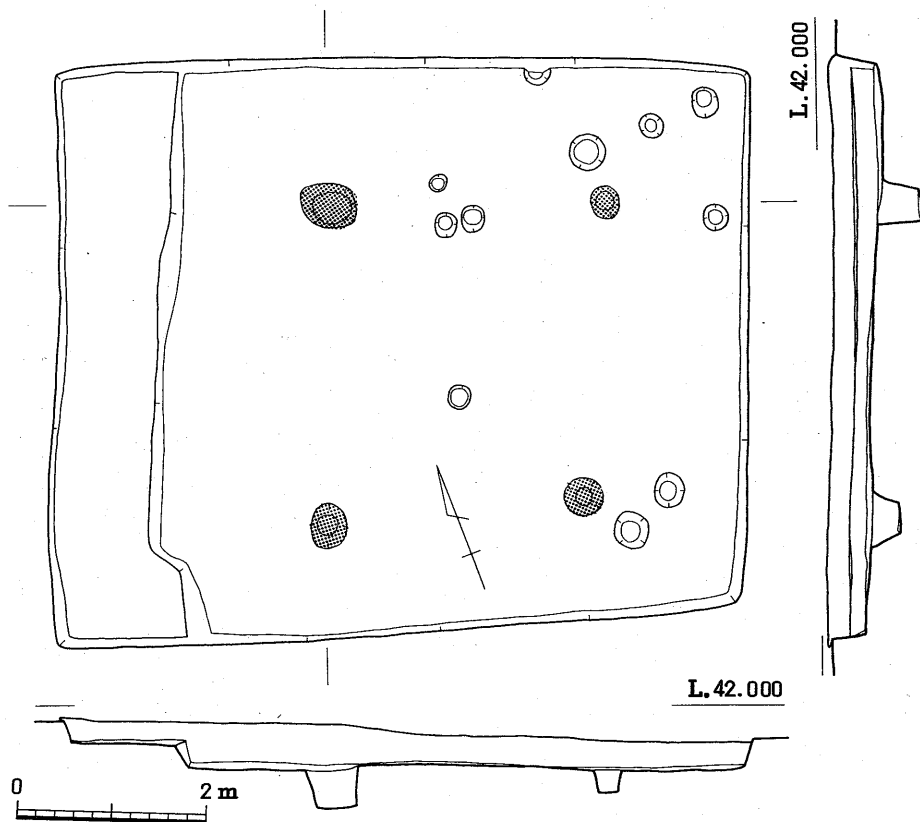
調査区の中央より若干南よりで検出した。東西7.2m、南北6mを測る方形プランの竪穴式住居跡である。住居跡西側に平均18cmの高さをもつベット状遺構が検出された。床面ははり床で、堅く叩きしめられていた。支柱穴は4本と推定される。

遺物は住居跡中央部からベット状遺構より多くみられた。特に19の中に6が、18の中に7が収まる状態で出土した。

出土遺物

3号住居跡から出土した遺物はいずれも土師器である。

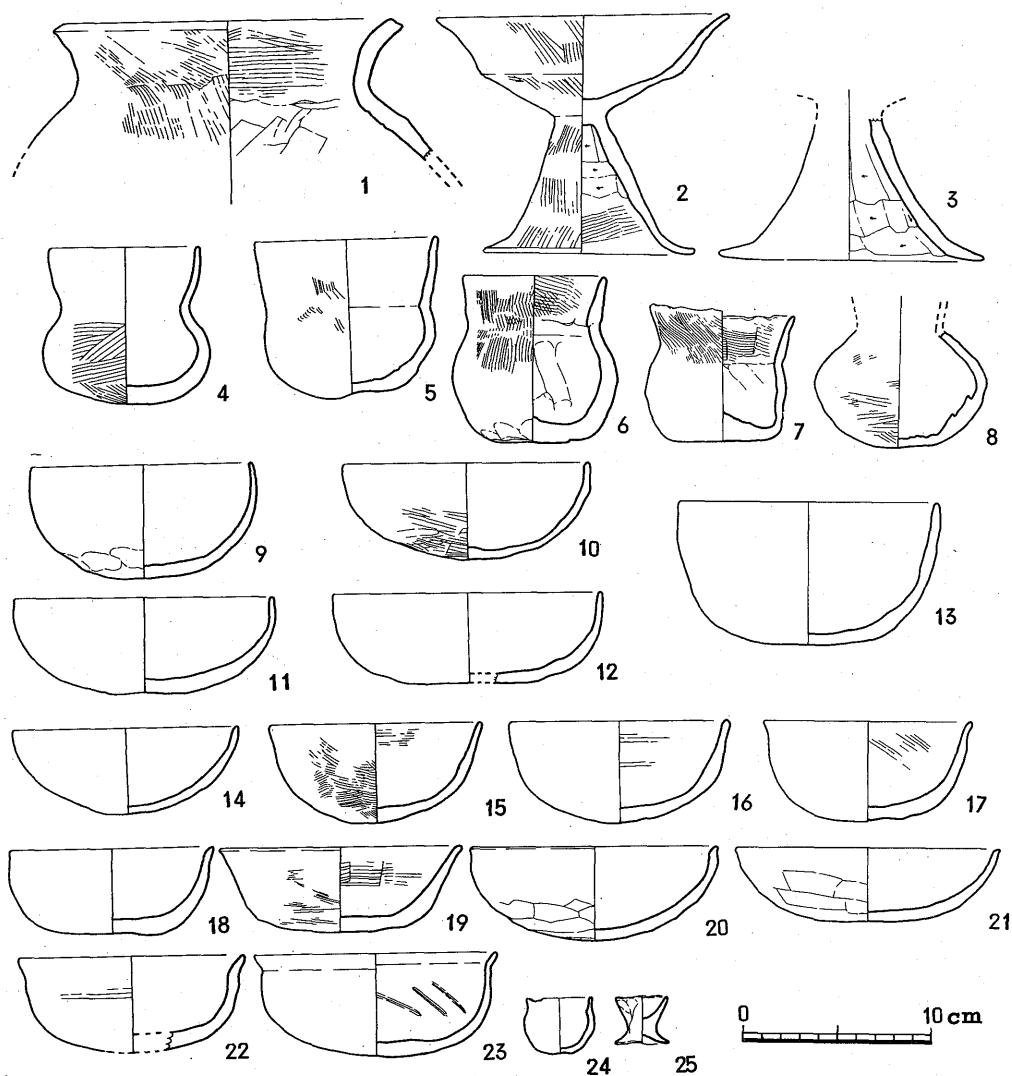
1は甕の口頸部で、器壁は比較的厚い。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部はあまい平坦面をもつ。2・3は高坏で、2は脚裾部と口縁の一部が欠失するがほぼ完形である。坏部は体部が直線的に外傾し、口縁部がやや外反する。底部はゆるやかにすぼまりながら脚部へ至る。脚



第8図 3号住居跡実測図(%)

部は直線的に開がり、裾部は外側に引き出される。4・5は小形丸底壺である。4は口縁部が僅かに内湾気味に外傾し、胴部中位に最大径8.8cmをもつ胴部へゆるやかに至る。丸底の底部は丸味はあまり強くない。器壁は比較的薄手である。

5は口縁部が僅かに内湾しながら立つ。頸部はあまりしまらず胴部へ至る。丸底を呈す底部の中央には直径3cm程度の平坦面が作られ、すわりはよい。全体にススの附着が認められ、胴部の一部に赤変が認められる。4・5ともに口頸部の長さが、器高の半分に近い割合を示す。6・7は平底の小壺である。6・7ともに口縁部は短かく、直線的に外傾する。6は胴部中央で最大径8.8cmを測るが、7はいびつな形態を呈しており、胴部も凹凸が多い。6には胴部にススの附着が認められる。8は小形丸底壺の胴部と思われるが、4・5に比べ頸部がしまり、胴の張りも強い。9～23は椀で、口縁部が内湾するもの(9)、直立するもの(10～13)、直線的に外傾するもの(14～16)、僅かに外反するもの(17～21)、やや強く外反するもの(22・23)に分けられ、13は他のものに比べ2倍近い器高をもつ。他に手づくね土器が2個体出した。



第9図 3号住居跡出土遺物実測図(1/4)

(5) 4号住居跡 (第10・11図 図版2・4)

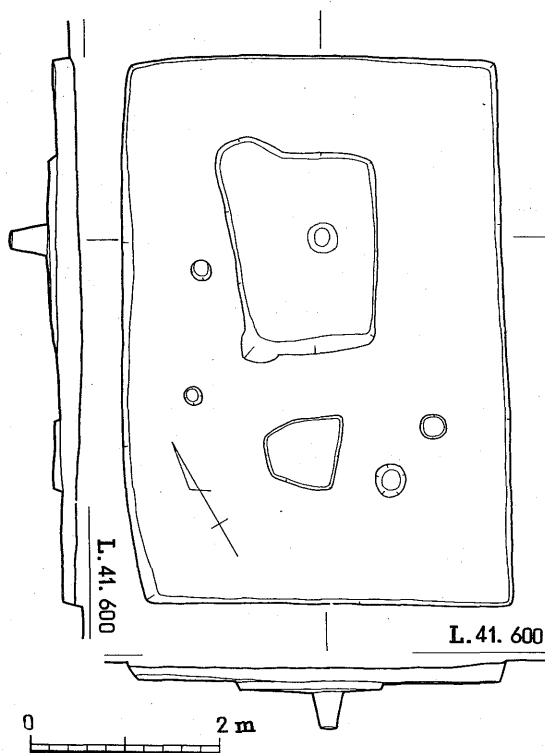
3号住居跡の南隣で検出した。長辺5.8m、短辺4mの長方形プランをもつ竪穴式住居跡である。床面のしまりは弱い。支柱穴は確定できないが、住居跡中央よりやや北側に8cmほどの浅い窪みがあり、さらに40cmの深さをもつピットを検出した。あるいは支柱穴とも考えられる。

出土遺物

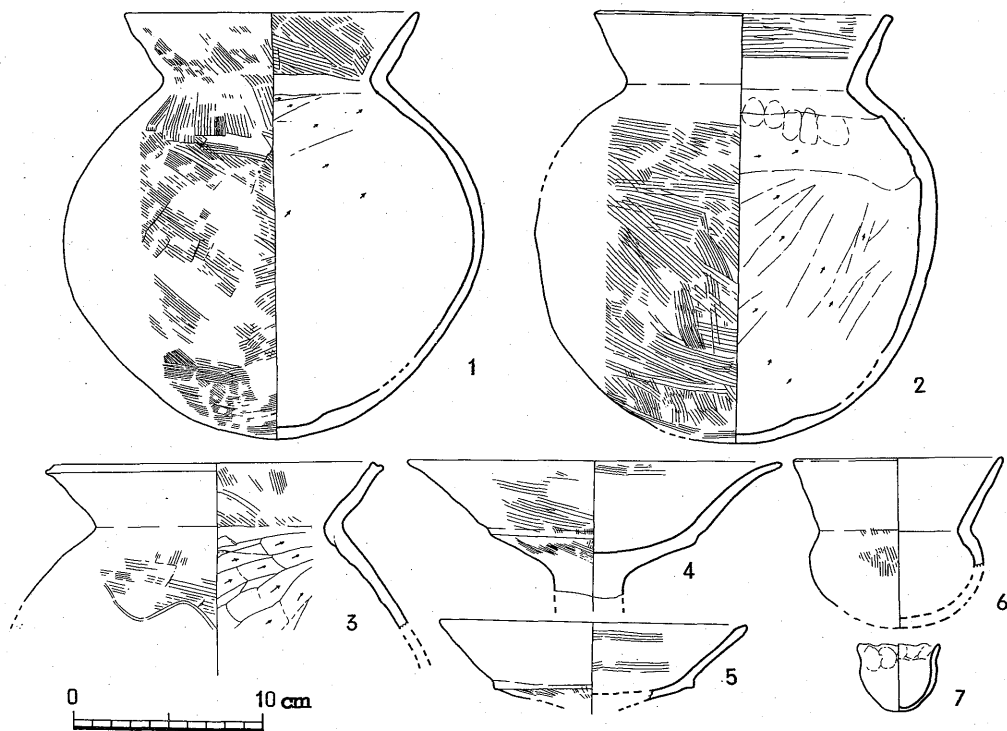
4号住居跡から出土した土器はいずれも土師器である。

1～3は甕で、1・2はほぼ完形に復原しえた。1は口縁部が直線的に大きく開き、口唇部は尖

り気味に収まる。胴部は強く張り22.2 cmを測る。胴部中位から口縁にかけてススを多く付着する。2は口縁部が直線的に外傾し、胴部は球状を呈する。胴部最大径は21.3cmを測る。胴部中位から口縁にかけてススが付着する。3は口縁部が内湾気味に開き、口唇部は凹面を呈す。胴部上位にヘラ描きの波状文が認められる。4・5は高杯の坏部である。4は体部が直線的に開き、口縁部は外反する。5は体部から口縁にかけて直線的に開く。4・5ともに体部と底部の境にあまい段を有し、底部は急速にすぼまりながら脚部に至る。6は小形丸底壺で、底部を欠失する。頸部のしまりはあまい。7は手づくね土器である。



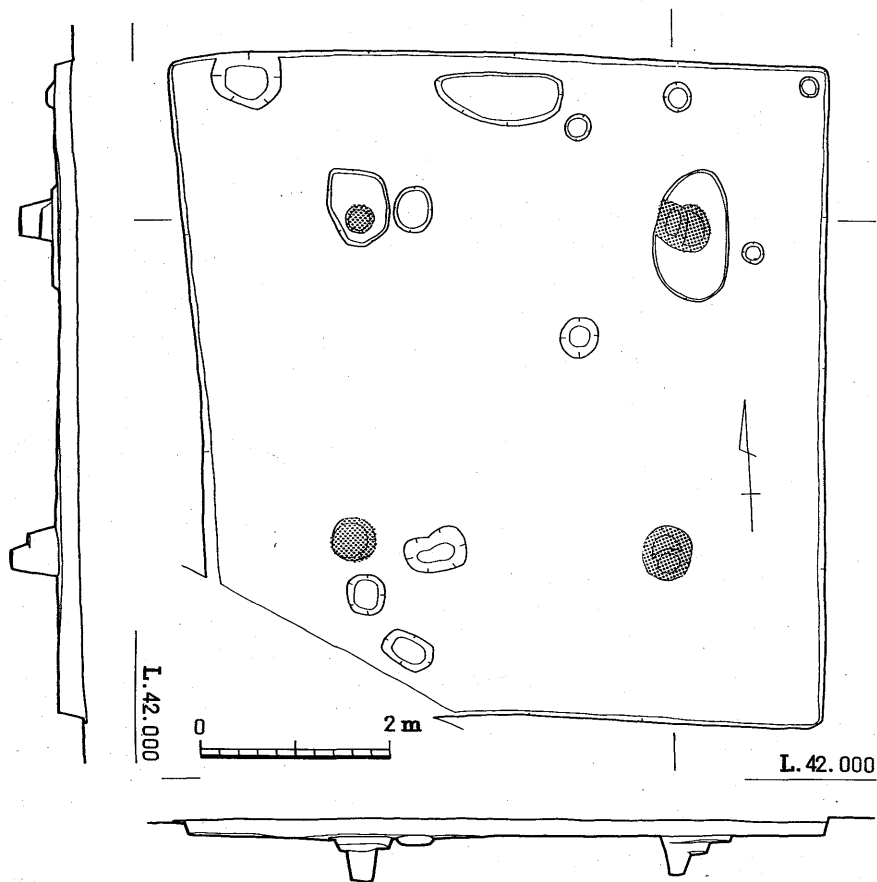
第10図 4号住居跡実測図(1/80)



第11図 4号住居跡出土遺物(1/4)

(6) 5号住居跡 (第12・13図 図版3)

調査区の南端で検出した。西南隅は畦で切られている。東西7m (最大)、南北6.8mのほぼ正方形プランの竪穴式住居跡である。支柱穴は4本で、付近のピットの状況から建てかえの可

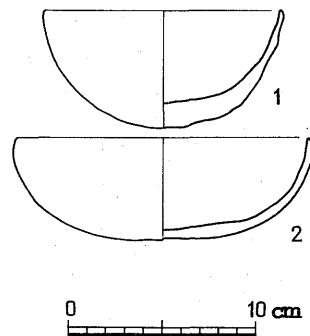


第12図 5号住居跡実測図(1/60)

能性も考えられる。壁高は平均18cmで、遺構の残りはよくない。床面は砂質で、しまりが無い。

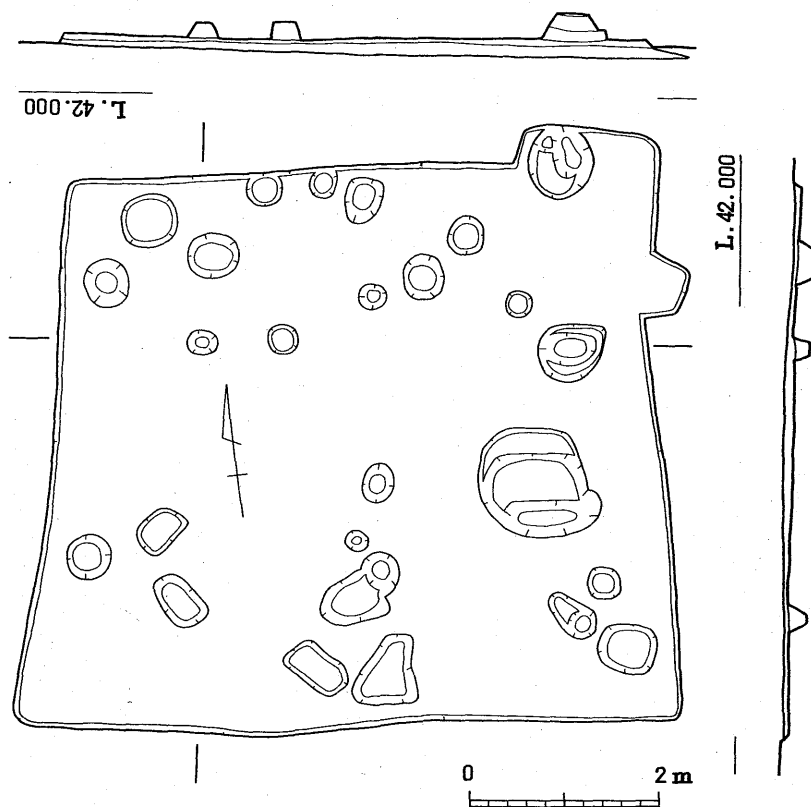
出土遺物

1・2とも土師器の碗である。1は口縁部が直線的に外傾し2は僅かに内湾気味に立つ。他に土製模造鏡が出土した。



第13図 5号住居跡出土遺物実測図(1/4)

(7) 6号住居跡 (第14・15図 図版3)



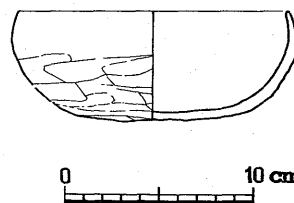
第14図 6号住居跡実測図(1/80)

調査区南西側、5号住居跡の北側で検出した不正方形プランの住居跡である。規模は東西7m、南北5.8mを測り、壁高は8cm程度で残りはよくない。北東隅には張り出しが認められる。

支柱穴は4本柱と推定されるが、全体にピットは浅い。

出土遺物

出土遺物は住居跡の残り具合もあるが、非常に少ない。図示するものは土師器碗で、口縁部が内湾するものである。



第15図 6号住居跡出土遺物(1/4)

(8) 7号住居跡 (第16・17図)

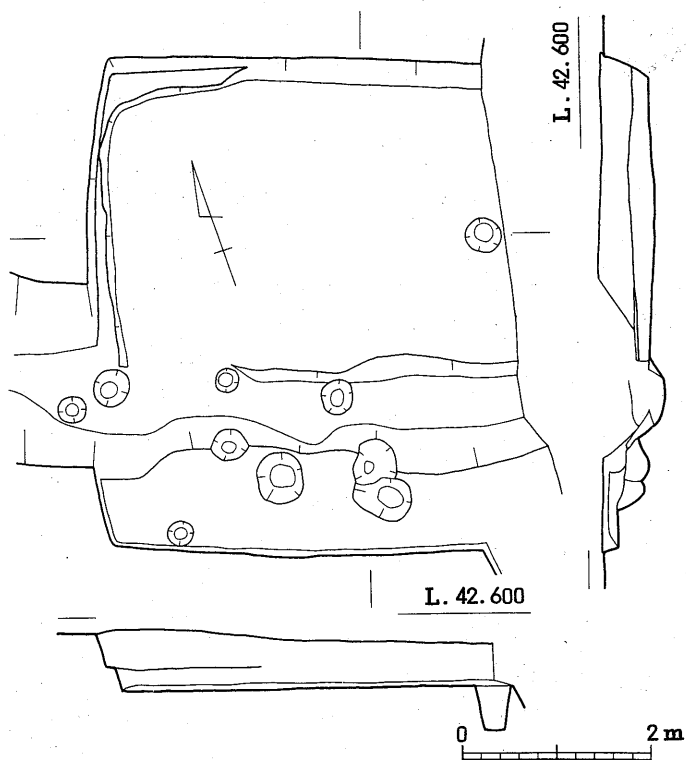
調査区南東側に位置し、東側は畦に切られ不明である。住居跡は方形プランを呈し、規模は南北5.2m 東西は残存4mを測る。住居跡の南側は古墳の周溝に切られる。北側隅から西壁にかけて段がみられ、建て替えの可能性も考えられる。また周溝北側床面は南側より15cmほど高くベッドとも推測できる。

出土遺物

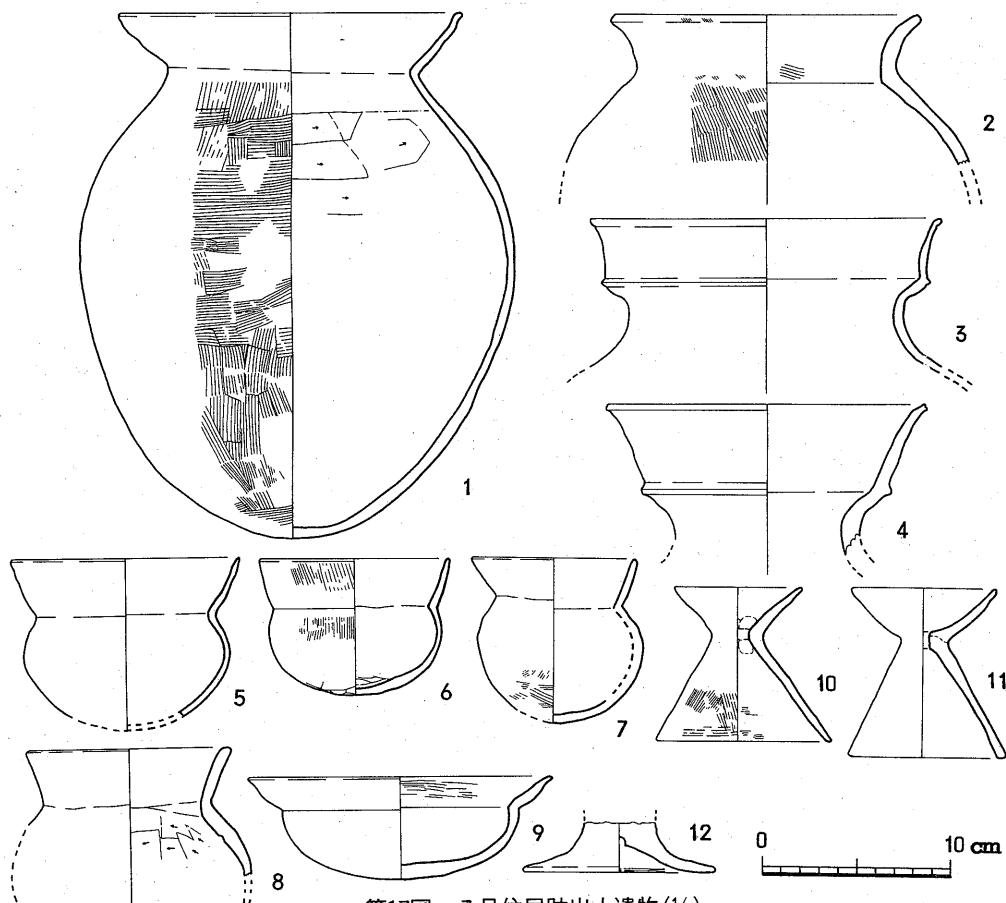
7号住居跡からは土師器と鉄鎌が出土した。

1・2は甕である。1は器壁が薄く、やや長胴である。口縁部は内湾し、胴部のやや高い位置で最大径をもつ。2はやや厚い器壁をもち、口縁部は外反する。3・4はくびれた頸部から口縁部が開き、さらに大きく屈曲して上方に伸びる二重口縁壺と推測され、4は口縁部の外傾が強い。5～8は小形丸底壺で、5～7は器壁も薄く、丁寧な作りである。

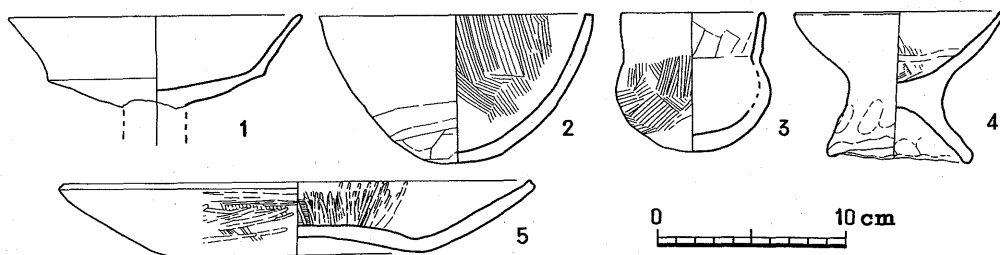
9は浅鉢で、浅い杯に短かい



第16図 7号住居跡実測図(1/80)



第17図 7号住居跡出土遺物(1/4)



第18図 脇田1号墳墳丘下の遺物 (1/4)

「く」の字状の口縁部がつく。10・11は器台で、脚は長く直線的に開き、受け部は10が直線的に大きく開き、11は椀状に開く。12は脚台である。

(9) 脇田1号墳墳丘下の遺物 (第18図)

1号墳墳丘下より出土したもので、7号住居跡に伴うものと考えられる。

出土遺物

いずれも土師器である。1は高坏の坏部で、体部は大きく直線的に開き、底部は急速にすばまり脚部へ至る。2は鉢である。3は小形丸底壺で、口縁部は短かく上方へ立つ。4は器台で全体にやや均整を欠く。5は皿で、体部は大きく開き、底部は上げ底である。

(10) 脇田1号墳 (第19・20・21図 図版3・4)

本墳は調査区の中央から東南側に寄ったところで検出された。標高42m、水田面からの比高5～10mの低丘陵に造営されている。封土は大半が失なわれており、石室も大破しているが、石室を中心として径約14mの周溝がめぐり、墳丘の規模が推定される。

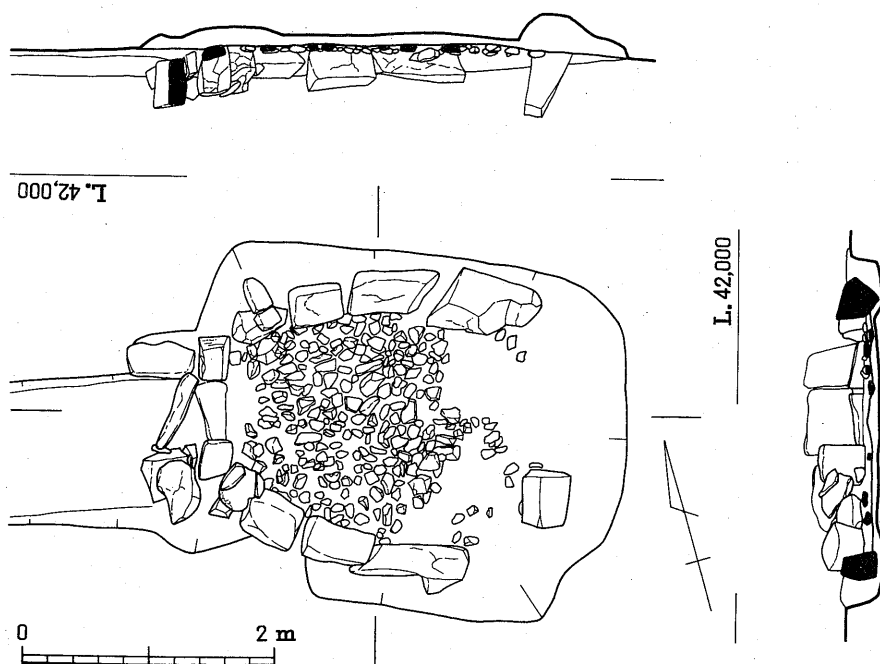
石室は地山を掘削して造っており、現況で最大長3.9m、最大幅2.8mの墓壇が確認された。

石室は主軸をN-72°-Wにとる単室の横穴式石室である。石材は大半がぬかれ、残存するものは羨道部から玄室前半の腰石程度である。玄室は最大長約240cm、最大幅184cmを測り、胴の張るプランを呈す。壁体の構成は右壁に4石、左壁に3石の大ぶりの花崗岩を横位に用いて腰石とし、左右壁玄門部側に更に小ぶりの石を1石補充している。玄門部は小ぶりの石材を立てて袖石とし、その間に長さ40cm、幅15～25cmの扁平な石材を配し楣石としている。この前方には閉塞に用いた幅66cm、高さ50cmの平石が立てられている。

出土遺物

須恵器(杯身・甕)、金環、銀環、刀子、直刀、鉄鎌、鉄斧が出土した。

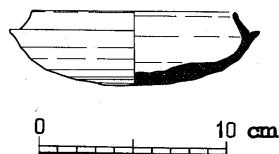
杯身は立ち上り高1.1cmを測る。立ち上りは内傾し、端部は引き起こされる。受け部は細い凹状をなし、端部はやや上方へ引き出される。甕は胴部の破片で、最大径は28cm程度と推測される。



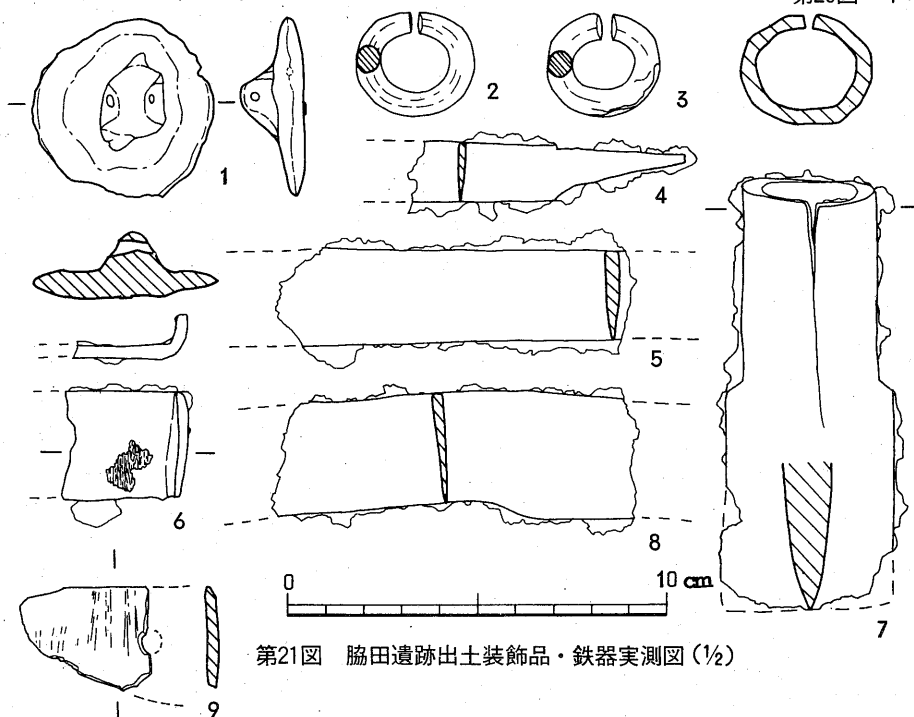
第19図 1号墳石室実測図(1/60)

(11) 脇田遺跡出土装飾品・鉄器(第21図)

1は5号住居跡より出土した土製模造鏡である。直径4.7cmの不整楕円形を呈し、高さ1.7cmを測る。背面につまみを貼付け、そこに小孔(中心部で直径2mm)を穿つ。



第20図 1号墳出土須恵器(1/4)



第21図 脇田遺跡出土装飾品・鉄器実測図(1/2)

2～7は1号墳石室より出土した。2は銀環で中実の銅胎に銀箔をおいたものである。外径3.0～2.7cm、内径1.7～1.3cmを測る。3は金環で中実の銅胎に金箔をおいたものである。外径3.1～2.8cm、内径1.8～1.6cmを測る。4は刀子で身部の中ほどから先を欠失する。茎部は長さ34mmを測り、身部は関に近い部分で身幅15mm、棟幅2mmを測る。5は直刀の身部で、身幅24～26mm棟幅4mmを測る。6は鉄鎌の基部で、残存長33mmを測る。身幅29mm、背幅3mmを測り、一部に柄のものと思われる木質が残る。7は鉄斧で、全長11.4cmを測り、刃部幅4.5cmと測推される。袋部は外径3.5～2.9cmの卵形を呈す。

8は7号住居跡出土の鉄鎌の破片で、残存長95mmで、背幅3mmを測る。身幅は基部からすると本来34mm程度あったと考えられるが研きべりして30mmほどになっている。

9は1号住居跡上位で出土したものである。滑石製の石包丁片の刃部・背部・折れ口など縁部を磨いたものである。

協田遺跡出土土器要説

(上段 外面調整)
(下段 内面調整)

遺構	番号	器種	口径	器高	外・内面調整	備考
1住	1	甕	13.2	(19.6)	①ハケ目 ②上位ナデ以下ヘラ削り	
	2	壺	13.7	(16.0)	①ヨコナデ ②タタキ	
	3	"	12.0	15.7	①ヨコナデ ②ヘラ削り	
	4	"	8.9	11.7	①ハケ目後ヨコナデ ②上位ハケ後ヨコナデ以下ハケ目	
	5	"	11.8	13.4	①ヨコナデ ②上位ナデ以下ハケ目後ナデ	床面出土
	6	"		(13.1)	①ヨコナデ ②上位ヨコナデ以下ヘラ削り	
	7	"			①ヨコナデ ②上位ナデ以下ヘリ削り	
	8	"			①ヨコナデ ②ハケ目	床面出土
	9	小壺	5.8~6.2	8.8	①ヨコナデ ②ナデあげ	
	10	"	6.2	12.3	①ヨコナデ ②ナデ	
	11	碗	12.0	4.9	①ハケ目 ②ナデ ③ヘラ削り	
	12	"	14.6	4.7	①ハケ目 ②ナデ	
	13	"	15	4.8	①ヨコナデ ②ヘラ削り	
	14	"	13.6	4.7	①ヨコナデ ②ナデ	床面出土
	15	"	14.3	4.6	①ヨコナデ ②ヘラ削り	
	16	"	10.2	(5.3)	①ヨコナデ ②ナデ	
	17	"	15.0	5.6	①ヨコナデ ②ナデ	
2住	1	甕	18.5	(29.9)	①ハケ目 (ヨコ) ②ハケ目 (上位タテ以下斜方向)	
	2	小壺	9.8	15.1	①ハケ目 ②頸部直下ナデ以下ヘラ削り	床面出土
	3	"	8.4	9.9	①ハケ目後ヨコナデ ②ナデ	下層 "
	4	"		(6.9)	①ハケ目後ナデ ②ナデ	下層 "
	5	高坏	17.2	13.3	①ハケ目 ②上位ハケ目以下ナデ ③ヘラ削り	
	6	"	18.5	(5.7)	①ナデあげ ②ナデ	
	7	"	21.6	(5.7)	①ハケ目後ヨコナデ ②ナデ ③脚ナデ ④ヨコナデ	床面出土
	8	"	21.0	(6.6)	①ハケ目後ナデ ②ナデ ③ヘラ削り ④ヨコナデ	下層 "
	9	"	20.4	(5.7)	①ハケ目後ヨコナデ ②ナデ ③ヘラ削り ④ヨコナデ	下層 "
	10	"		(9.5)	①ハケ目後ナデ ②ナデ ③ヨコナデ	上面 "
	11	"		(6.0)	①ナデ ②脚ナデ ③上位ナデ以下ヘラ削り ④ヨコナデ	上面 "
	12	碗	10.2	4.6	①ナデ ②ハケ目	
	13	"	13.3	5.1	①ヨコナデ ②ナデ	
	14	"	14.2	5.2	①ヨコナデ ②ナデ	下層出土
	15	"	14.2	(5.9)	①ヨコナデ ②ナデ	下層 "
	16	"	13.2	6.2	①ハケ目後ヨコナデ ②ナデ ③ヘラ削り ④ナデ	上面 "
	17	"	13.2	6.2	①ハケ目後ヨコナデ ②上位ハケ目以下底部までヘラ削り後ハケ目	
	18	"	13.9	5.8	①ヨコナデ ②ナデ	下層出土
	19	"	14.4	4.7	①ヨコナデ ②ナデ	
	20	"	15.2	4.9	①ヨコナデ ②ナデ ③ヘラ削り ④ナデ	上面出土
	21	"	11.8	5.4	①ヨコナデ ②ナデ	上面 "
	22	手づくね	5	3.9	①ヨコナデ ②ナデ	下層 "
3住	23	"	4	(2.5)		
	24	"	4.3	3.6		上層出土
	25	"	3.4	3		下層出土
	26	"	3.6	2.9		
	27	"	2.7	2.7		七層出土
	1	甕	18.4	(7.5)	①ハケ目後ヨコナデ ②ハケ目後ナデ	
	2	高坏	15.6	12.8	①ハケ目後ヨコナデ ②頸部直下ナデ以下ヘラ削り	
	3	"		(7.8)	①ハケ目後ヨコナデ ②ナデ ③脚ナデ ④上位ナデ以下ヘラ削り ⑤ハケ目後ナデ	
	4	小壺	7.9	8.3	①ヨコナデ ②ナデ	
	5	"	9.7	8.4	①ハケ目後ナデ ②ナデ	

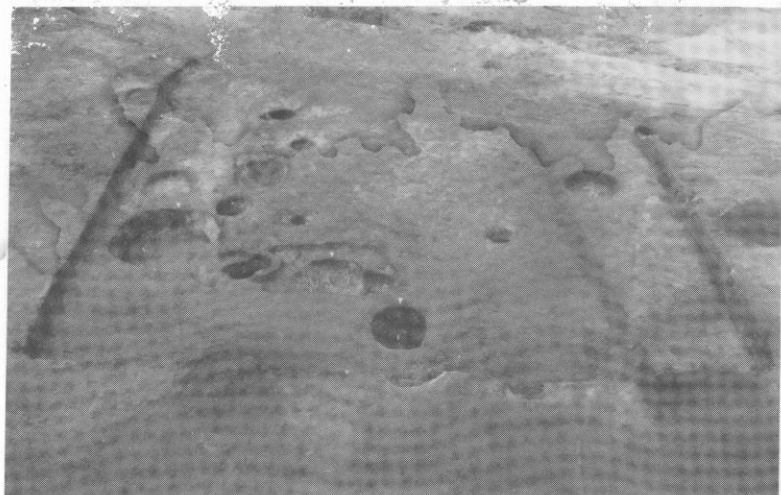
遺構	番号	器種	口径	器高	外・内面調整	備考
4住	6	小壺	7.6	8.8	ハケ目 ① 上位ハケ目以下ナデ ② 未調整	
	7	"	7.6	6.9	ハケ目 ① へら削り ② 未調整	
	8	"	(6.3)		ハケ目 ① 指圧痕多い ② ナデ	
	9	碗	11.6	6.05	ハケ目 ① ナデ ② 未調整	
	10	"	13.0	5.15	上位ハケ目 ① 後ヨコナデ以下ハケ目 ② ナデ	
	11	"	13.7	5	上位ナデ ① 中位ヨコナデ以下ナデ ② 未調整	
	12	"	14.2	(4.8)	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	13	"	13.8	7.6	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	14	"	11.9	4.55	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	15	"	11.2	5.25	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	16	"	11.6	5.4	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	17	"	11	5.25	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	18	"	10.8	4.5	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	19	"	12.8	4.5	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	20	"	13.1	5	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	21	"	14	3.0	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	22	"	12	(4.9)	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	23	"	12.7	5.6	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	24	手づくね	3.5	2.95	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	25	"	2.8	2.5	ヨコナデ ① ナデ ② へら削り	
	1	甕	15.5	22.35	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	上層出土
	2	"	15.8	22.7	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	上層 "
	3	"	17.8	(8.8)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	床面・上層出土
	4	高坏	19.7	(7.2)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	胴部C波状文 上層出土
5住	5	"	16.2	(4.1)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	上層出土
	6	小壺	11.1	(7.8)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	上層 "
	7	手づくね	4.4	3.6	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② へら削り	上層 "
	1	碗	12.8	6.25	ヨコナデ ① へら削り後ナデ ② ナデ	上層出土
	2	"	15.4	5.3	ヨコナデ ① へら削り後ナデ ② ナデ	上層 "
	1	碗	14.4	5.75	ヨコナデ ① 上位ヨコナデ以下へら削り後ナデ ② ナデ	上層 "
	1	甕	18.2	28.1	ヨコナデ ① 上位ヨコナデ以下ナデ ② ナデ	下層出土
7住	2	"	16.5	(7.7)	ヨコナデ ① 上位ハケ目後一部ナデ ② 不明	下層出土
	3	壺	18.7	(7.9)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位へら削り	下層出土
	4	"	17	(8)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位へら削り	下層出土
	5	小壺	12	(8.4)	ハケ目 ① ナデ ② へら削り	下層出土
墳丘下	6	"	10	4.2	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	7	"	8.7	8.75	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	8	"	10.8	(6.9)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	9	浅鉢	16.2	5.5	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	10	器台	9.2	8.25	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	11	"	8.8	9	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層 "
	12	脚台		2.6	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	床面出土
	1	高坏	15.5	(4.9)	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層出土
	2	鉢	14.4	7.8	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層出土
	3	小壺	7.5	7.4	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層出土
	4	器台	11.15	7.8	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層出土
	5	皿	24.9	4	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	下層出土
1号墳	1	坏身	10.6	4.95	ハケ目 ① 後ヨコナデ ② 上位ハケ目以下へら削り	周溝出土

圖

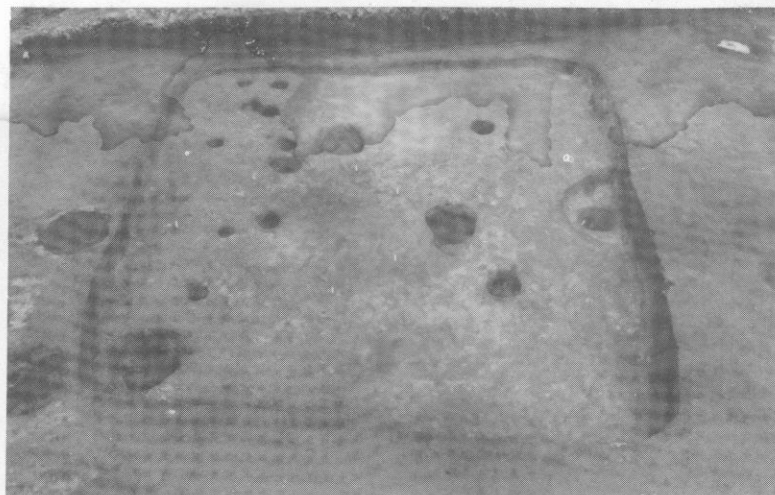
版



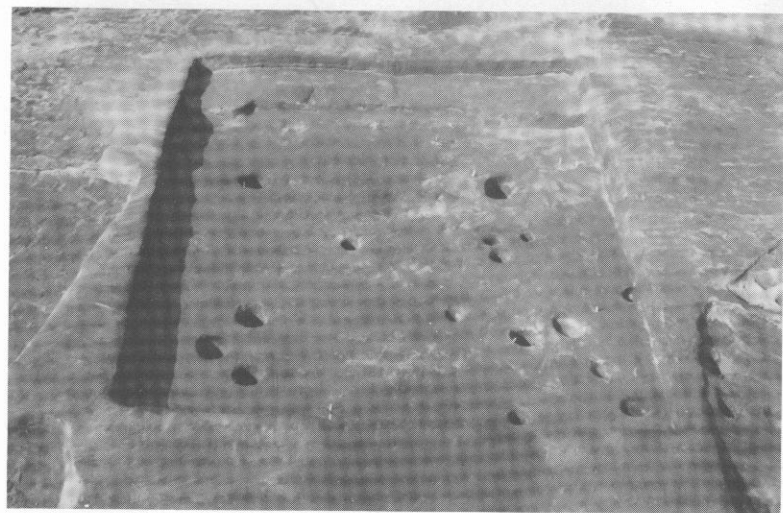
調査区全景 北から



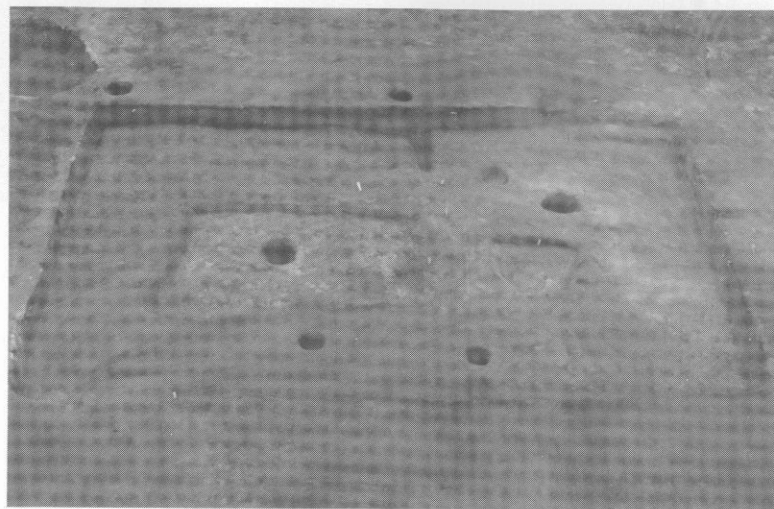
第1号 住居跡



第2号 住居跡



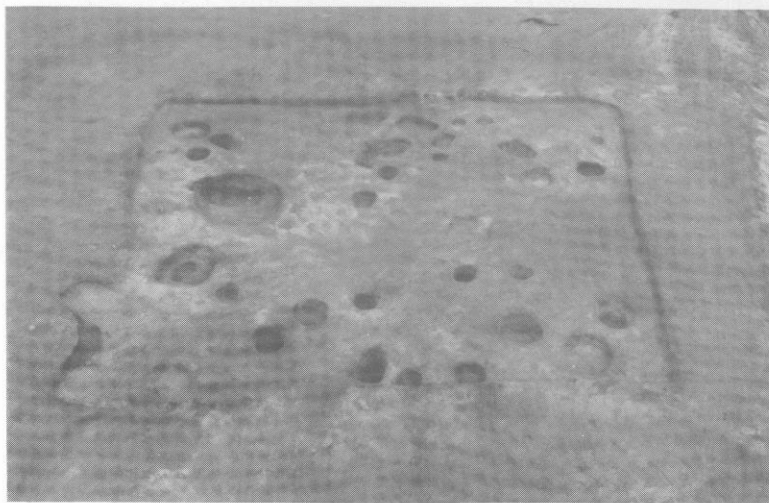
第3号 住居跡



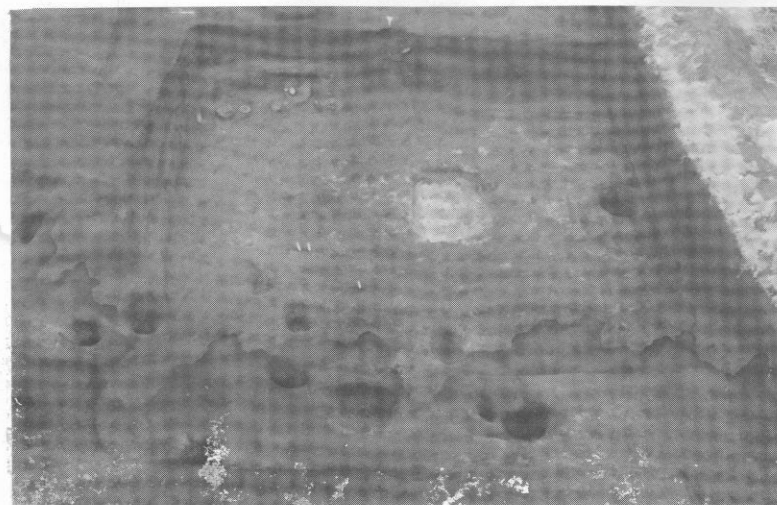
第4号 住居跡



第5号 住居跡



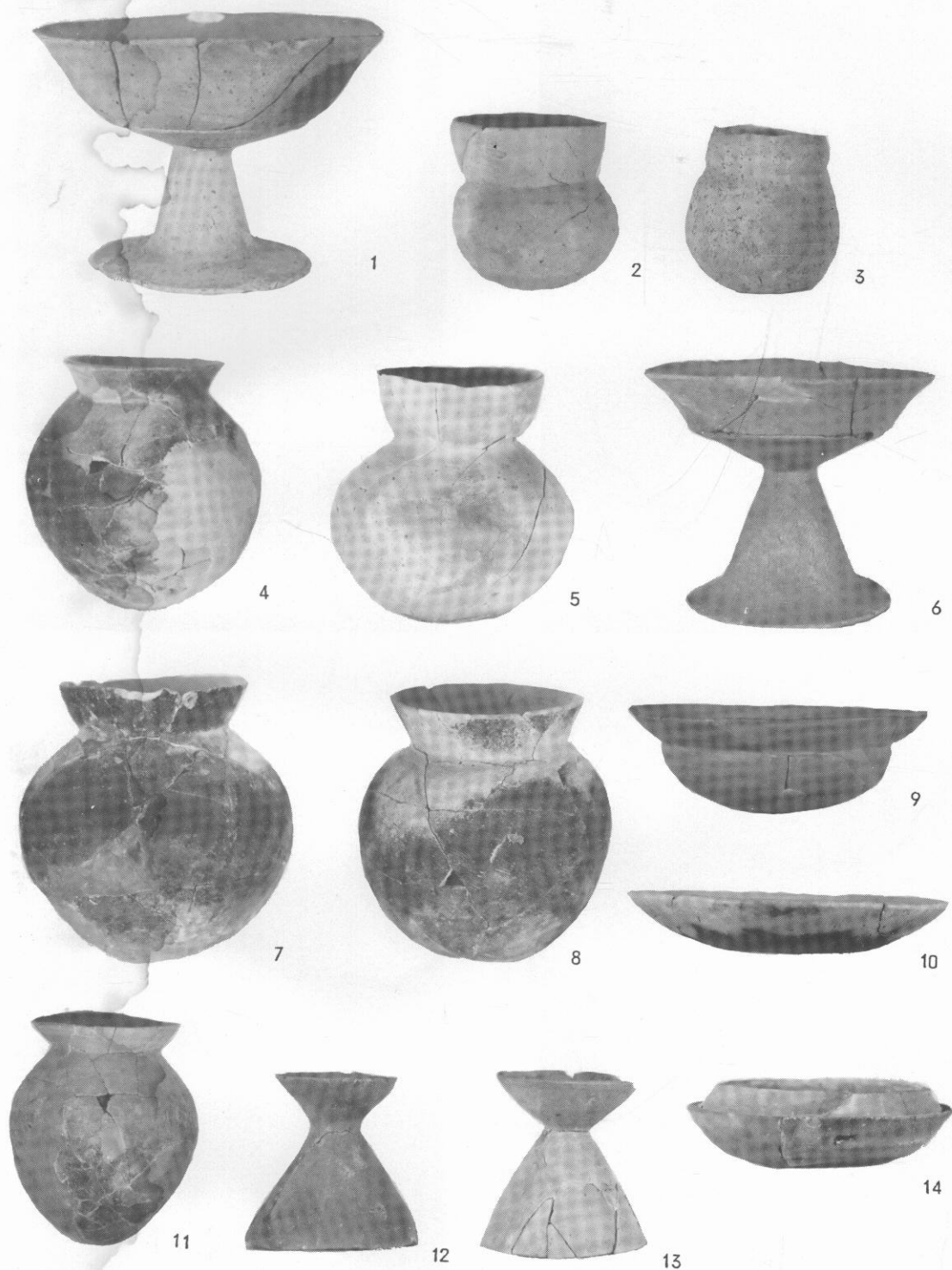
第6号 住居跡



第7号 住居跡



第1号 墳



1 ~ 3 1号住居跡出土遺物
6 3号住居跡出土遺物
9 ~ 13 7号住居跡出土遺物

4・5 2号住居跡出土遺物
7・8 4号住居跡出土遺物
14 脇田1号墳出土遺物

脇 田 遺 跡

筑紫野市文化財調査報告書第 9 集

昭和 5 9 年 3 月 3 1 日

発行 筑紫野市教育委員会

筑紫野市大字二日市 7 5 3 - 1

印刷 原 田 印 刷

福岡市中央区平尾三丁目 3 0 - 2 9